

(別紙)

成果の説明書

(氏名) 井上 真由美	(学部) 経済学部
<p>1 重要事項</p> <p>【研究活動】</p> <p>(1)「草創期の神戸高等商業学校における倫理教育—内容と成果およびその背景—」に関する調査・研究</p> <p>ビジネス活動には倫理が伴わなければならないという考えは、今や常識となりつつある。とりわけ現代の大企業のように、社会の隅々にまでその影響力を及ぼすような組織（しかも長期にわたって活動し続ける組織）は、いわゆる企業倫理と無縁ではいられない（Paine, 2003）。もし正直さ、責任、他者への配慮、あるいは守るべき価値観の提示といったようなことがそうした組織から免除されてしまえば、「ほとんどの人は非常に生きにくい、非常に不安な社会で生活することに」になってしまうからである。</p> <p>したがって現在、ビジネスマンに対する倫理的教育にも大きな関心が払われている。田中（2004）によれば、1985年頃までには「ビジネス・エシックス」という分野が米国でひとつの学問領域として大きく広がり、また日本で大学教育としての「経営倫理（学）」が本格化し始めたのは1993年頃であった。</p> <p>ところで、このような現代の潮流からはおそらく独立していると考えられるが、わが国では、日露戦争勃発前（1902年）に設立された高等商業学校において、ある種の商業倫理が学生たちに教えられていた。出光佐三（出光興産創業者）ら著名な経営者を輩出した神戸高等商業学校（現・神戸大学）では、初代校長である水島鏡也らによって「学理的研究のみでなく実際との関係を重視した学問」だけでなく、「商業の社会性」についても教授されていたのである。</p> <p>本研究では、神戸高等商業学校の草創期における商業教育、とりわけその倫理的な側面に焦点を合わせ、その内容と成果を分析する。またそれと同時に、同校においてそもそも倫理的な教育が重視されるようになった経緯についても明らかにする。</p> <p>その目的は、第一に、高等教育機関における倫理教育の手法と有効性にかんする新たな知見を得ることであり、第二に、日本資本主義の揺籃期における同校の経験を手掛かりとして、ビジネスと倫理のかかわりについての洞察を深めることである。</p> <p>なお、本研究による成果は、以下の通りである。</p> <p>①第33回高崎経済大学公開講座での講演「出光佐三の企業家精神と学校教育」2016年11月28日、於 高崎経済大学</p> <p>②神戸大学経済経営研究所公開シンポジウム「海賊の選択—出光佐三の企業家精神—」での報告「出光佐三の理念と神戸高等商業学校の教育」とパネルディスカッションへの参加 2017年1月23日、於 神戸大学</p> <p>③「アントレプレナーシップと倫理教育—アントレプレナーには何が必要か?—」山田幸三・江島由裕編著『1からのアントレプレナーシップ』碩学舎、2017年。</p> <p>*本研究は、公益財団法人上廣倫理財団による平成27年度研究助成を受けて行われた。</p>	

(2) 「高崎市製造業の存立基盤に関する調査研究」プロジェクト

今年最終年度を迎えた地域科学研究所のプロジェクトの一環として本研究は行われた。その研究成果は下記報告書の第 5 章に収められている。調査対象企業は、自動車用部品、航空宇宙関連部品等を製造する共和産業株式会社である。現社長である鈴木宏子氏へのヒアリング調査にもとづき、同社のこれまでの軌跡（「絶えざる創業」と特徴づけられる）を辿るとともに鈴木氏のアントレプレナーシップに焦点を絞って執筆されている。併せて、ミンツバーグの議論を参照しつつ、社長の仕事とはどのようなものであるかという点にも言及されている。

「絶えざる創業の軌跡—共和産業—」高崎経済大学地域科学研究所編『地方製造業の展開：高崎ものづくり再発見』日本経済評論社、2017 年。

2 その他の事項

【教育活動】

(1) ゼミナールにおける講演会の開催

今年度もゼミ 3 年生が長寿企業の長寿の理由を探る調査研究を行った。調査では、岡直三郎商店様、養命酒製造様にご協力いただいた。また今年度もゲストスピーカーをお呼びして研究に関連のあるお話をしていただいた。

比賀江 克之 氏（元住友商事社員・大東文化大学講師）

「インドネシアの ODA プロジェクト—商社活動の社会的意義—」（5 月 13 日）

(2) 地域科学研究所の公開講演会の開催

公開講演会の講師として長田貴仁氏をお招きし、近年地方創生が叫ばれる中で、そのための諸施策に何か課題や問題点がないかについてお話いただいた。講演会では主に、内向きの地方創生の限界、広い視野を持ち、自らビジネスを創造していくような気概が若者に必要になることが指摘され、学生たちも多く気づきを得たようであった。

長田 貴仁 氏（岡山商科大学教授）

『「小粒な地方創生」に死角はないか』（6 月 3 日）

(3) 「創業者創出ミーティング」の開催

群馬県産業経済部商政課との共催で「創業者創出ミーティング」を開催した。本ミーティングは、若者の創業意識の醸成を目的としたもので、社会起業家である大木洵人氏をお招きし、創業の体験談を話していただいた。大木氏は、聴覚障害者の「手話通訳者の不足」「手話から引く辞典の欠如」「手話の娯楽の不足」などの問題解決のためにさまざまなサービスを開発、提供している。その先駆的なビジネスモデルは海外からも注目され、アショカ（米国の著名な社会起業家支援団体）が認定するフェローに東アジアで初めて選ばれた。講演後のコメントペーパーからは、多くの学生が大木氏の社会起業家としての生き方に感銘を受け、社会の問題解決が仕事に成り得るということを理解したようであった。

大木 洵人 氏（株式会社シュアール代表取締役）

「問題解決に向け大学 2 年の僕が選んだひとつの道」（10 月 14 日）

3 次年度以降の計画・抱負

【研究活動】

平成 29 年度は、引続き「高等商業学校の商業倫理教育」に関する調査研究を続ける計画である。特に神戸高商と同時期に設立された他の高等商業学校における商業倫理教育の調査内容をまとめる予定である。

【教育活動】

引続き、外部の有識者、実務家との連携を重視した活動を行いたい。